

75/9 黒の手帖

19

黒の手帖

19号

一九七五年九月



定価 300円

自由クラブの時代	大沢正道	1
「大杉栄の旅」小感(4)	秋山清	27
グスタフ・ランダウアー	C. ウォード	36
「共同体」批判論・序説	奥沢邦成	44
太陽について	菅田正昭	49
ナショナリズムと文化(2)	R. ロッカー	56
編集後記	大沢正道訳	

表紙 高木 昭

自由クラブの時代

それはひとつのぐしゃつとした時代であった。今様にいえば、挫折の時代とでも呼べばよいのであろうか。敗戦の衝撃は、むしろそのころになってじわじわと人びとの精神を蝕んでいた。天皇を先頭とするいわゆるオピニオン・リーダーたちの見事な変身ぶりが、精神の腐蝕に拍車をかけた。戦争の時代を落丁にしたままのマルクス主義の流行は、決して腐蝕してできた精神の空洞を埋めるに足るものではなかった。

人びとはあらゆるものに飢えていた。食物に飢え、酒に飢え、活字に飢え、人の心に飢えていた。たとえば、バクダンと異名を取ったメチアルコールであっても、酔うことができればよしとしなくてはならぬくらい、それくらいあらゆるものに飢えていたのである。

チャップリンの「黄金狂時代」が有楽座にかかった時、大半の人びとは立ったままで笑った。戦災を受けたためかどうか定かではないが、ともかく座席は前の方にちよぼちよぼと残っているだけで、大部分はがらんとしたコンクリートの土間であった。それでも人びとは金を払って、チャップリンを観た。

いまにしておもえば、もっと飢え切らなくてはいいなかったのかもしれない。飢えの苦しみにこらえかねて、ついまがいのものをほんものであるかのようにもあそんでしまったのかも知れない。まがいのものをほんものにすりかえるいかさまは、敗戦を終戦と呼ぶことに始まり、女中をお手伝い、盲人を目の不自由な人と言ひ換える、言い換えごっこにまで及んだ。まがいのものがほんもののづらをしてのさばり、ほんものとまがいのもの見分けがつきにくくなったのである。

自由クラブというなんの変哲もない名前の会が作られ、東京の片隅でささやかな活動を開始したのはそういう時代であった。自由クラブとは、この四月に亡くなった松尾邦之助の命名で、松尾の甥の松尾志呂生などは「ずいぶん平凡な名前だなあ」と腐っていた。まがいのものの自由の氾濫するなかで、あえて自由クラブと名づけたのは、松尾の見識だったのかもしれない。

自由クラブには、無規則の規則と称する規則があった。「自由クラブは何物にも捉はれない、何者をも尊崇しない、自己の思想の発

大沢正道

展のために努力する全き自由の友の会である」というもので、これも松尾の文章である。平凡な会名に比して、無規則の規則という言葉は平凡でない。といって非凡でもなく、どちらかというと稚拙ともおもわれるのだが、志向するところはよく語られている。

この「何物にも捉はれない」「全き自由」が、自由クラブの旗印であり、また松尾の口癖でもあった。それはマックス・シュティルナーの唯一者の思想に由来するもののだが、横行するまがいものの自由の仮面を剥ぐ役に立っし、「二度とふたたびだまされまい」と決意した純な若者たちにアピールする力を持っていた。

今更いまでもなく、シュティルナーの主著『唯一者とその所有』は大正年間に辻潤により訳出され、改造文庫にも収められ、かなり版を重ねた。また、岩波文庫にも草間平作の訳が入っており、大正から昭和にかけて多くの読者をもった。埴谷雄高が学生時代「一種特別なスティルネリアンを自称して」いたことは、『影絵の世界』で彼自身語っているとおりだが、シュティルナーの唯一者の思想には、若者の做ったソリブシズムをよきにつけ、悪しきにつけ濾過する働きがあった。若者の多くは『唯一者とその所有』のいくつかの断片をその心に沈ませて、思い思いの方向に散っていった。埴谷もまたそのなかの一人である。

もっとも、たとえば辻潤のように『唯一者とその所有』のなかへ、逆にわれとわが身を沈めていく人びとも、少数ながらいいた。辻潤は『唯一者とその所有』を『自我経』と仏教風に意識し、ニーチェの超人をもじって低人と自称し、低人教を提唱した。このあたりはシュティルネリアンというよりは、まさに辻潤の面目躍如たるところであり、イエスの十二使徒のように、辻潤門下の三哲（ウラ哲

事ト部哲次郎、ソバ哲事小野庵保蔵、カサ哲事内田庄作）が輩出したりした。しかめつらしくいえば、シュティルナーの日本的ヴァリエーションということになるのかもしれない。

戦争はこれらの流れをすべて断ち切った。辻潤は敗戦の前年に没し、敗戦後、シュティルナーも辻潤も、すさまじい飢えと、ちょうどそれに見合うかのような世を挙げてのまがいものの横行のまゑに、すっかり忘れ去られていった。

松尾邦之助がスペイン船「ブルス・ユルトラ号」などを乗り継いで、九年ぶりに日本に戻ってきたのは敗戦の翌年、一九四六年三月二十七日のことであった。その年の九月十六日、日本アナキスト連盟が結成後最初に開いた「大杉栄追悼 無政府主義講演会」に、彼は弁士として招かれている。この講演会では植村謙、岡本潤が大杉栄の追悼詩を朗読し、石川三四郎、岩佐作太郎、近藤憲二らが講演した。当時は読売争議の最中であり、争議団の中核にいた綿引邦農夫が烈々としたアピールを行なった。松尾もまた読売新聞に籍を置いていたが、争議団とは立場を異にしていた。彼は講演のなかでそのことにさりと触れ、悪びれるようなところは少しもなかった。この率直さが彼の身上なのだが、それは人間的な魅力ともなれば、誤解や憎しみを買う原因ともなるような性質のものであった。そして、「欧州に於ける無政府主義運動」と題する講演は、戦中戦後にかけて永く鎮国状態におかれていた人びと、とりわけ青年たちの間に強い関心を生んだのである。これらの青年たちのなかに、解放青年同盟の田辺一夫、川崎寛太郎、大沢正道らがいた。

翌一九四七年五月、松尾は「アン・リネルの個人主義とクロポトキン」と題する評論を三回にわたって『平民新聞』に寄稿した。そ

れは辻潤をからませながらアン・リネルを紹介し、クロポトキンと

アン・リネルを革命家と詩人の差という視点から対比論評した画期的な評論であった。すでにそこにはいわゆる松尾節が現われているが、彼の文章に初めて接する者にとって、それはひとつの新鮮な知的衝撃として響いた。

この評論は、おそらくおなじ五月に解放青年同盟が主催した「無政府主義思想講座」のための草稿をもとにしたものであったろう。松尾はそこで「欧州に於けるアナルコインデビュアリズム」について講義することになっていたのだが、事情があつて出席できなかったのである。

松尾の評論を載せた『平民新聞』のおなじ紙面の片隅に、「リネル研究会」という見出しで次のような記事が出ている。

「去る五月三日の思想講座にある事情で出講できなかった松尾邦之助氏を囲んでアン・リネル研究会を開くことになった。日時、毎月第一、第三日曜、後三時、場所、松尾邦之助宅（世田ヶ谷区赤堤町一―一三七）」

六月一日、梅雨のはしりをおもわせる豪雨のなかで開かれた第一回の会合に集ったのは、松尾、田辺、大沢、それに雨野一雄、上原利夫の五人であった。田辺、大沢はさきに述べた解放青年同盟創立以来の活動的なメンバーであるが、解放青年同盟は五月二十五日に解散していた。解放青年同盟の解散は、親組織である日本アナキスト連盟内の勢力交替を反映していたが、田辺や大沢らが松尾の影響もあつていわゆるアナルコインデビュアリズムへと傾斜していったことも、その一因となっていた。そして、中学以来の親友である雨野と上原は初めから個人主義的傾向が強く、日本アナキスト

連盟の集会などに時折顔を出しても、ついに加盟することはなかった。

雨のためか薄暗い部屋で、松尾を囲んで四人の青年たちは三時間あまり熱心に語り合った。初会合なので、まず互いに思想の交換をいうことであつたが、力量の違いで当然松尾が多くを語るようになった。長い間日本を留守にしていた松尾は、しみじみと日本に自分のような思想をもつ人のいない淋しき、全き自由を要求する者のいない物足らなさを述べ懐し、われわれの周囲に十人でも二十人でも、真に自由を解し、思想を語り合える友人を集めようと提案した。

松尾を中心とする小さなグループがここに誕生した。

このグループの当初の意図は、松尾が『平民新聞』紙上で紹介したアン・リネルを研究することであつた。松尾がアン・リネルの講演テキスト『さまざまな個人主義』（一九二二年）をむさぼるように読んだのは一九二三年の夏だというから、その時から数えても二十数年前のことになる。その後彼は一九三〇年に一度だけアン・リネルに会っている。彼が『読売新聞』に「巴里の辻潤アン・リネル」という記事を書いたのは、この会合ののちのことである。当時、松尾は一九二九年に帰国した辻潤のあとを受けて、二代目の読売新聞海外文芸特置員であつた。辻潤とは、一九二八年、パリで会っている。松尾の記事に触れて、辻は「自己完成への道、あばろじあetc」という、のちに『痴人の独語』に収められた文章を『読売新聞』に寄せた。

「松尾君はアン・リネルを『パリの辻潤』と呼んだが、勿論ジュルナリストの気転？で、誰も真面目にとるものはないであら

うから安心するが、自分の考へ方が彼に似てゐることは少しも不思議とするに足りないばかりか、かなり共通的なもののあることだけは事実である。

アン・リネル (Han Ryner) の名前を知ったのはかなり昔 (六七年前だと思ふ) で、友人百瀬二郎によつて教へられたものだ。恐らく日本でいち早く彼の著書を取りよせて読んでゐたのは自分の知つてゐる範囲では彼位なもので、恐らく他に誰かがアン・リネルを読んでゐるだらうか？ 自分は彼の所持してゐる数種の書物 (『ペエル・ディオデヌス』『第五福音書』『パラボール・シニイク』等) を見せてもらったが、勿論その中の一冊も読んではいないのである。自分は度々彼にその中のいづれかを翻訳することを奨めたが彼も亦多年の飲酒の習癖を改め得ず、転々として未だにその仕事は放擲されてゐるのである。勿論、現今の如き出版界の情勢の下に於てはリネルの著書の翻訳出版の如きは到底不可能ではあるが (嗚呼！ なんと劣悪な愚書の洪水よ！) 私は若し彼に意志があるなら、再びそれを奨めたいのである。

巴里滞在中自分は『L'anarchie』と云ふ片々たる月刊雑誌を二、三度買つて見た。それには毎号リネルが執筆してゐた。それから彼の著書の広告も載つてゐた。偶々古本屋で彼の著書を二冊ばかり発見したので、当時ニースにゐた無想庵に送つて読むことを奨めたりした。彼は勿論、インディヴィジュアル・アナキストではあるが系統はストア派で、大いにディオゲネスに私淑してゐることは彼に『ペエル・ディオデヌス』の著書があるのでもわかる。ストイックの精神を抜きにしては彼の所説を論ずることは出来ない。」

辻にアン・リネルを教えた百瀬二郎は、アン・リネルのほかジョルジ・パランドのような徹底した個人主義者のものなども渉猟した博識な才人だが、その豊かすぎる才気が世に容れられなかったためか、あるいは生来の酒好きがそれにかつたためか、晩年は熱海のさる女郎屋の亭主に納つたと噂されている。

もつとも、当時、アン・リネルを読んでゐたのが、百瀬だけだったとは言ひ切れない。石川三四郎が編集してゐた『ディナミック』に「アン・リネル号」(一九三〇年八月) があり、椎名其二や望月百合子がバリで何度かアン・リネルの講演やディスカッションを聞いたたり、個人的に訪問したりした回想が書かれてゐる。おそらく石川もアン・リネルの読者の一人であつたらうし、現に戦後松尾が訳出したアン・リネルの『赤いスフィンクス』(一九五六年 長嶋書房) のテキストは、石川の蔵書であつた。しかし、石川たちのアン・リネルへのアプローチは、主として非暴力直接行動や良心的戦争抵抗といった運動論のチャンネルであり、辻や松尾らのチャンネルとはまるで違つてゐる。これはアン・リネルという人物の大きさの証しであらうか、それとも日本における思想受容の屈折の証しであらうか。

戦前松尾が所蔵してゐた十数冊にのぼるアン・リネルの書物は、他の多くの蔵書とともにベルリンの地下室で戦災のため灰になり、占領下にあつて外国との通信を制限されてゐた一九四七年当時、それらを手に入れることは不可能であつた。したがつて松尾宅での研究会のテーマがテキストの入手しやすいシュティルナーへと移つてゐたのは自然の成行きであつた。

辻潤訳の『唯一者とその所有』をテキストにして、自由につい

て、平等について、所有について、憑れた人について、共產主義について、自我人について、というふうに通条的に取られたメモを片手に、松尾が情熱をこめて語る言葉はちょうど乾いた砂地に浸み込む清水のように、青年たちの心に食い込んでゐた。それは一種のゼミナールであつたが、もちろんありふれた大学のゼミのようなものではなく、たえず己れの生き方との自問自答が反芻されてゐた。

青年たちはつねにそこからなにかを得ることができたし、次の会の日の訪れが待遠しく思われるのであつた。

当時の大沢の日記にその雰囲気伝える一節がある。

「六月十五日

Stinner 研究会。

今日は自由について。今まで考えていたこと、ぼんやりとかすんでいたこと、それらが実に明らかに Stinner によつて語られてゐる。

政治的自由、社会的自由、人道的自由、完全な自由。自由にも程度があり、種類がある。

しかし俺はこう考える。その出発点は Ego の自由である。完全な自由である。それが家からの自由、換言すれば政治的自由に脱皮し、それでも完全な自由はえられず、富からの自由、換言すれば社会的自由になり、更に人道的自由になり、再び完全な自由に戻る系列、それが自由の段階である。

個人より出発し、個人に帰る、それが自由の自己運動とでもいえる形であろう。それ故に、政治的自由も、社会的自由も、ただそれが個人の自由、俺の自由に帰着するいみにおいて自由なのであつて、それに欠けた帰着はすでに自由よりの逸脱である。自由で

はない。

『断片的な自由は自由ではない』と Stinner は言ひ。

社会運動にしてもしかり。社会運動もただ個人の自由、俺の自由を守る立場にある限り、解放運動というのである。」

松尾の家が世田谷から大田区新井宿に移るとともに、シュティルナー研究会もまた移動した。たまたま雨野や上原の自宅が大森にあり、川崎の家もそう遠くなかつたことも、会の発展になにほどこ幸しいした。

この会で酒が出始めたのは肌寒さの感じられる十月初旬のことであつた。「今日は寒いからカストリでも飲みながら話そう」といったことがきっかけであつた。大沢を除いて、だれもがよく飲み、飲むほどによくしゃべつた。しかし、酒に飲まれるようなことは少なかった。ひとはひと、己れは己れという主体尊重のモラルは酒の席でもあまり崩れなかつた。日本の酒飲みによくありがちなべたべたした「全体主義」は斥けられたのである。もつとも時には、酒も煙草も依怙地に拒むビュリタン然とした大沢がつるしあげられる場面がないではなかつた。

会に酒が出、それが恒例となつた頃には、常連もふえてゐた。辻潤の息子の辻まこと、松尾がベルリンで知合つた佐藤豊、松尾の甥の松尾志呂生、雨野の友人である金子重雄、松尾がある講演会を通じて知つた高校生の金子嗣郎らである。『唯一者とその所有』の講読も一応仕上つたところから、話題はおのずからシュティルナーを越えて辻潤に及び、さらには辻潤を窮死させ、われわれを不遇に追いやる日本を呪ふ放談へと拡散した。

日本人にはまるで個性がない、エスプリもない、話の泉のような

愚劣なものがもてはやされる、あれは全くの物識りだけで、思想のカケラもないじゃないか、日本人は羊の群れだ、とりわけ女はひどい、それに比べるとさすがフランス人だ、メイドでもちゃんと自分の意見をもってるし、それを堂々と主張する、日本人は物真似だけだ、オリジナリティがない、日本では個性ある思想も芸術も育たない、出る釘は打たれるし、足は引っぱられる、孤独を知らず、ひとりであることができない……etc——こういった「日本批判」が最も日本的な酒であるカストリ焼酎のメートルがあがるとともに、かぎりなくエスカレートし、いつ果てるとも知れなかった。

それは、シュティルナーも足繁く通ったというベルリンのヒッペル酒場にたむろするフライエン（解放者）の雰囲気にいささか似寄っていたかもしれない。そこにはボン大学を追放されたブルーノ・パウエルやその弟エドガー・パウエルら、のちにヘーゲル左派と呼ばれるようになった一群の思想家や、芸術家、ジャーナリスト、学生が集まり、プロイセン専政に対して日頃の鬱憤を晴らしていた。フリードリッヒ・エンゲルスがシュティルナーを見掛けたのもこの酒場である。

この連中は飲んだ酒代が払えなくなると、みな巷に出て通行人をつかまえ、どうか一文めぐんで下さいと乞食をしたり、借金で苦しんでいる友人を救うのだと言って、酒場の仲間を狩り集め、金を貸した男の家へ押しかけ、そこで底抜けの痛飲をやるなど、罪のない、したい放題のことをやっていた。

ある時、アーノルド・ルーゲがここを訪れ、自由大学の建設に協力を求めたところ、酒場の連中はこれを野次り、下品な罵声を浴びせて演説を妨害した。これに腹を立てたルーゲは、「君らのような

汚いちりあぐたどもによって、人間や民衆の解放はできやしない。高遠なことを説くまえに、まず君らが君ら自身を清潔にすることから始めたらどうだ」と捨てぜりふを残して酒場を出て行った、というエピソードも残っている。

「松尾サロン」——その頃、研究会はこう呼ばれることがあった——は、ヒッペル酒場ほどではもちろんなかった。集ってくる連中の多くはいわゆる破壊型ではなかったし、それに「松尾サロン」は酒場ではなく、松尾の自宅であった。日本のしきたりからして、個人の家であまり羽目を外すことは当然自戒された。

「松尾サロン」が松尾の自宅を離れて、あるいは大森近辺の喫茶店や飲屋で、あるいは辻潤の眠る駒込西福寺で、あるいは西村伊作の文化学院の教室で、というように転々と流浪の旅に上ったのは、おそらく集まる顔触れもふえ、松尾個人に迷惑がかりすぎる、という配慮からであつたらう。もともと、その頃になると青年たちも自分の言葉でしゃべろうとし始め、もともと自由な集会を欲したこともあった。もしあの時、ヒッペル酒場とか、戦後パリで実存主義者たちがたむろしたといわれるカフェ・ド・フロールのような空間が東京のどこかにあつたら、自由クラブの歴史は変わったかもしれない。この広い東京でたかだか数時間、二十人足らずの人が集って自由に議論風発する空間がないぞうそのようにおもわれるかもしれないが、当時、場所の確保は頭痛のタネだったのである。

一九四九年十月十五日発行の「自由クラブ通信」3号に、「なお喫茶店や事務所や西福寺など転々と会合場所を取換えて苦労していた東京も漸く西村伊作氏の御厚意で、文化学院の教室を会合場所に借りられる見込みがつき、一安心している」とあるのはこの辺の消息

を物語るものであろう。

のちに述べるように、西村は松尾のすすめで自由クラブの会員となり、一九四九年五月八日にですべらの会と自由クラブの共催で催した虚無思想講演会の会場に文化学院の講堂を貸したり、西村が主催していた文化教会の講演に松尾ら自由クラブのメンバーを呼んだり、いろいろと肩入れをしてくれた。もともと、文化学院の教室を会合場所に使えたのは数回で、その後雨野の紹介で新橋駅前にある蔵前工業会館の和室を借りられるまでは、集会場所は相変らず不安定な状態であった。

アン・リネル研究会がシュティルナー研究会となり、さらにウナムノや辻潤を説いたり、日本を呪ったり、カストリをあおったりする「松尾サロン」に転じたこのグループが、自由クラブの看板を掲げるにいたった筋道はあまりはつきりしない。「松尾サロン」と一九四八年十月の自由クラブの成立までの間にはどうもユネスコという平和運動が挟まっているらしい。

というのは、一九四七年十一月二十七日、日比谷公会堂で行われたユネスコ運動全国大会の準備委員会幹事長を松尾が務めており、それ以後も、松尾はかなり熱心にユネスコ運動を推進している。この時松尾とコンビを組んだのが新居格で、辻、田辺、大沢もこれに協力している。松尾がその頃どれくらいユネスコに熱中していたかは、「ユネスコと日本」（座談会記録（一九四八年八月 河出書房）、「ユネスコの理想と実践」（一九四八年十二月 組合書店）と二冊の本を出していることから推察できよう。「ユネスコの理想と実践」のあとがきで、「日本のユネスコ運動のために、というよりはむしろ平和への強い本能的な衝動にかりたてられた僕は、過去一年

有半、南は熊本から北は仙台まで駆け回って地方の善意を持ったユネスコ協力会の人々や、青年や、学生や、労組の代表者等と膝をつき合せ、ユネスコを解説し、議論し、その実践方法などに関して研究し、相談し、いろいろ教えられるところが多かった」と松尾は述べている。

「パリの辻潤」アン・リネルが良心的抵抗者の運動のイデオロギーとなっても少しもおかしくないように、シュティルナーや辻潤の共感者松尾が、ユネスコを通じて国際平和や国際文化交流に一肌脱いでも、あえて奇とするにはあたらない。松尾がとくに共鳴したのは、ユネスコ憲章の冒頭にある「戦争は人間の心の中ではじまるものであるから、人間の心の中で、平和の防衛が建設されなければならない」のくだりであつたようだ。「松尾サロン」の座談でもしばしば彼はこのくだりを口にした。

松尾が常務理事兼事務局長を務めた東京ユネスコ協力会は、理事長新居格のほか小松清、松岡洋子、中島健蔵、青野季吉、高橋邦太郎、藤田たき、阿部義宗等々、理事三十余名、評議員三十余名、いずれも錚々たる文化人をずらりと並べた寄合世帯であつた。占領下にあつて、ユネスコが国際文化交流の最初の窓口になるかもしれないという期待から、多くの文化人たちはわれもわれもその名前をつらねたのであろう。口や名前は人一倍出したがるが、実務や金にはくると背を向ける多くの文化人たちを相手にしての運動は、永らく外国にいて日本のならわしにうとく、またつきあひも浅い松尾にとつてきわめて骨の折れるものであつたにちがいない。一部の青年たちを辟易させた「松尾サロン」での日本への呪詛は、あるいはユネスコでの憤懣の鬱憤ばらしたったのかもしれない。

しかし、海千山千の仕事師的文化人の群れのなかにあって、直情経行で純なところのある松尾がリーダーシップを取っていきけるはずはない。東京ユネスコ協力会、日本ユネスコ協力会連盟を成立させたと、松尾はユネスコの雑誌を刊行し、その編集に辻や田辺、大沢らを加えようとする腹づもりであったが、その目算は見事に外れ、松尾自身、ユネスコ運動から手を引く結果となった。その後、ユネスコは古手の外務官僚や文部官僚と彼らにつながる文化人の巣となっていくのである。

松尾がそれまでとくに名づけることもなく重ねてきたサロンを、自由クラブと銘打って再スタートさせようと思案したのは、おそらくユネスコへの情熱が裏切られた反動も、その一因であったろう。

『平民新聞』第93号（一九四八年十月十八日）は、自由クラブの誕生を次のように報じている。

「松尾邦之助、佐藤豊氏らを中心に、なにもものにも促されない全き自由の思想所有者の結果を目ざして、このほど『自由クラブ』が形成された。

このクラブは形式的な有名人名中心の、そして不消化物の思想紹介をこととする職業的無思想家教授や思想のない小説家どもの無力を防禦しようとする文壇、思想界、ジャーナリズムに対しサンショの役を果そうとしている。

さしあたってパンフレットを継続して発行してゆくが、その道はやがてアナキズムにまで通じるものと思われ、興味深いものがある。」

この不消化な記事は、たぶん大沢の筆であろう。大沢はその頃、日本アナキスト連盟と不即不離の関係を保ち、『平民新聞』に時折

寄稿し、連盟の思想文芸誌『リベルテ』の編集にも参画していた。この記事の文章はまことにまづいだが、随所に松尾節が散見され、自由クラブ結成の動機もおぼろげながら望みされる。

自由クラブは結成後まもなく、『自由クラブ叢書』第一号を発行した。一九四八年十月二十四日である。表紙裏に例の「自由クラブ無規則の規則」を掲げ、自由クラブ会員として、松尾邦之助、佐藤豊、辻まこと、川崎寛太郎、上原利夫、大沢正道、松尾志呂生、田辺一夫、金子嗣郎、金子重雄、雨野一雄の十一名を列記している。この会員の列記はフランス流なのか、その後も新しく定期刊行物が出るごとに松尾の発意で繰り返された。

内容は「自由クラブ叢書発刊に際して」と題する松尾の発刊の辞と、おなじく松尾の訳によるヴィクトル・バッシュの『無政府個人主義』の緒言および第二版出版に際した序文である。このバッシュの本は松尾志呂生が神田の古本屋で見つけてきたものであった。B5判十六ページ、雨野のカッティングによる謄写印刷というささやかなものだが、手作りであるだけに草創期の熱意の迸りをそこに感じ取ることができる。

いつの場合にも草創期がいちばん充実し、活気に溢れている。いささかマンネリズムに陥った俗称「松尾サロン」も、自由クラブと看板を掲げ、一つの思想運動への志向を明確にすることによって、ふたたび当初のシュティルナー研究会の時のような活気を取り戻したのである。松尾の発刊の辞では、『自由クラブ叢書』第一号にとどまらず、バッシュの書物の第一章「無政府個人主義の理論家としてのシュテルネル」や、シュティルナーを忘却から救い出したジョン・ヘンリー・マッケイの『マックス・シュテルネルの生涯と著作』など

を「連続的に紹介して行く」ことになっていたが、実際には二号以降は刊行されなかった。

もともと、マッケイの書物は日本で最もドイツ語が堪能と、松尾が折紙をつけた佐藤の手ですでに訳出されていたようだ。これが印刷されなかったのは、おそらく分量が謄写印刷するには適当でなく、カッティングの引受け手がいなかったからであろう。佐藤の訳稿は、その後松尾が著わした『スティルナーの思想と生涯』（一九五〇年星光書院）に吸収された。それについて松尾は同書ではとくに言及していない。

『自由クラブ叢書』は一号で沈没したが、自由クラブの思想宣言を発しようという試みは、『アッフランシスムの宣言』として結実した。この思想宣言の形態もまた松尾らしくフランス風であった。それは起承転結のつとめた宣言文ではなく、クラブ員がそれぞれ想を練ってこしらえたアフォーリズム的な短文を持ち寄り、それらを取捨選択してまとめあげたのである。

まず、松尾の筆になるこの宣言のまえがきをお目にかけよう。ちよつとユニークなものである。

「同類、同人、同族、同胞といったように日本人は徒党や同族の意識でかためられ、国家意識、民族意識しか持合せず、最近になってやっと自我だの個人だのが喧しくいわれ初めたのは、この敗戦によって日本人が国家や民族のはこりを失い、急に淋しい個人、或は個体としてつつ放され、より所を失い、急に駭いて自分を凝視したからである。

もう同人、同族などという言葉を止めよう。『僕』に似た人は

いくらもいる……が、『僕』と同じ人は全宇宙に一人もいない。これくらい確かなことはない。自由クラブの同人という代りに異人という字を使ったのは『僕』と『君』とは類似した思想の持主かも知れない……が、『僕』は『君』に対し、永久に異人であるからである。

この異人が集っておこがましくも、アッフランシスム Affranchisme という新語を作って、この異人どもが抱いている類似した思想の宣言をしようと申合せた。

Affranchiとはフランス語の解放された奴隷のことでもあり、郵税を前納して自由に旅行が出来る手紙のことでもあり、また、オスカー・ワイルドのいう魅惑的で初恋を刺戟する『不良』のことでもある。

我々がアッフランシという字をほんの思いつきで選んだのは十九世紀の前半期に、ベルリンの酒場ヒッペルに集った自由人パウアー兄弟や、スティルナーの仲間のことを世人がフライアンと呼び、パリのモンマルトルの『黒猫』に集った同類の自由人共をアッフランシと呼んでいたことを思い出したからである。

自由人、解放者、超自由人、などという日本語を無理に使って表現して見たところが、ドイツの『フライアン』やフランスの『アッフランシ』の翻訳にはならない。仕方がないから、アッフランシという原語をそのまま拝借する。

次にアッフランシ共のアッフランシスムなるものをふりかざして宣言するが、我々仲間はこれを別に教理にもしないし、それを公式化そうとしない。何となれば、我々は我々の宣言にも捉われたくないからである。」

この異人たちが持寄つてまとめあげたアフォリズム的な宣言は、四十五項より成っている。それらはもちろん理路整然と展開されたものではなく、随所に自己撞着を繰り返しながら、それでいてびりつとしたエスプリの輝きを秘め、出色の思想宣言である。そのすべてを転載する誘惑に駆られるが、禁欲して目星しい条項を摘記するにとどめたい。

◇我々アッフランシは、ありとあらゆる公式を蛙の小便のように小馬鹿にする。我々は我々自体の存在だけで足り、自己を護るために公式を必要としない勝利者として生きたいのである。

◇我々は公式に頼らない。従つて我々自身自身の生活がどんなものなのか明瞭にそれを判断し得ない。我々は日々の生活と呼ぶ行為の上にその身を任せているのだが、それが可なりいいかげんなものだということを正直に徹底的に了解したいのである。

◇アッフランシは因習的迷信や、もろもろの学説や、習慣と暴君の作つた道徳的幻影や、党派や既成宗教を相手にせず、ただ我々の自由な発想の開花を常に楽しみ、解放された独一な自己の幸福にのみ生きようとする。

◇アッフランシは社会と個人が対立する場合、個人を護る。がこれは社会に対して我々が冷淡であつたり、無頓着であるということではない。我々は社会があつての我々でなく、我々個体の自由と、幸福と自己享樂の為に、我々の複数であるこの社会を認め、それを利用する立場にいる。

◇アッフランシは外界の現象のみか、自己をも矛盾した滑稽な存在として見る。そのため、絶えざる不安と、時には痛ましい絶望の中にも生きる。けれども、この不安と絶望は我々を粉砕して落伍者にする代りに、それを克服し、その利用者となり、却つてその故にこそ生をより真剣に愛せんとする。

◇国家だとか、社会だとか、それがよし如何に光輝あるものであろうが、醜惡極まるものであろうが、それをただ生理的需要で生れたものとして認める。だからこそ、我々が、如何に個々に立籠らうが、我々の生活が、つねに時局や政治や、社会に左右されることを否定しない。だが左右されながらも、ただ我々はそうした国家や社会を、自己の尺度でしか見ない。そして、それ等一切の諸現象を一時的な、外部的なものとして最大限度に利用する。が、若しそれが自己及び自己の複数でありその延長である隣人の為に単なる拘束であり、不幸の原因である場合、苛烈な過激な社会批判者としてそれに叛逆する。

◇我々は強制や思想の統一による羊群収攬の組織としてのあらゆる

独裁政治に反対する。と同時に、羊のままの大衆を巧に煽動し、徒に世を騒がす革命家の虚栄と偽善、その暴力的破壊行為の一切に組まない。

◇アッフランシはあきらめた自由に満足する羊群の一匹ではない。

我々はひとり歩きを誇る淋しい自由な狼となつて生き、そのような狼が自然にグループを結合することを望み、常に少数者の誇を持ち、我々の人格の力で、地味に一步一步、辛抱強く、憑れた隣人の考え方の顛覆に働きかける。

◇我々は神を信じない。けれども神を信する人々を決して蔑まない。黒旗を持ち、赤旗を振る世の「宗教人」に対しても同様である。

◇個体としての我々は運命的に過去とつながっている。従つて歴史を否定しない。けれども、歴史や伝統が言葉となつて固定し、我々の自由な思索を曲げ、それを妨げる場合、断乎として、それに叛逆する。

◇アッフランシは偉大であらんが為にひとつの理想を追うローマンチストでもなく、現実を感傷的に否定する厭人家でもなく、ただひたすらに生き、いが為に多角に人生を味索し、享樂するリアリストである。

◇だが、アッフランシの享樂は、本能やボンノオを尊重することに

よつて初められるが、それに溺惑する弱者の享樂ではない。何となれば、単なる溺惑が眞の享樂を奪い、その溺惑者を憑れた人間にするからである。

◇アッフランシは安息やオアシスよりも不断の努力と緊張と、健康を必要とする貧しい生活を選ぶ。けれども貧しさの故に来る束縛や、無力や、不自由を回避する。

◇もし自分を忘れて酔つ払っているうちに終点に到着した——ということであれば旅行は誠に申分のない快適なものである。

◇我々は性欲と食欲に関する社会的な虚偽と偽善の一切に挑戦する。我々が囃む陶醉の爲ならば、それが女であらうと、宗教であらうと、食欲であらうと、科学的思想であらうと、酒であらうと、それは我々にとって一向かまわない。

◇ただ酔つ払つて汽車から振り落されないようにしよう。そして徹底的に酔うために、我々の宿酔おちよめからまず覚醒しよう。

◇そこに集るために、我々は我々のいる家から出掛けなくてはならない。

◇歩くために考えない……考えつつ歩む。

この宣言が完成したのはおそくとも一九四九年二月末頃までは

ずだが、活字になって公にされたのはずっとこのことである。そのまに騰写刷で印刷されたかどうかはよく分からない。

その前の年の六月に、『虚無思想研究 1』が星光書院から刊行されている。星光書院は往年の辻潤の仲間荒川畔村（関根康喜）がはじめた出版社で、荒川は、大正末に刊行された雑誌『虚無思想研究』から辻潤はじめ新居格、村松正俊、ト部哲次郎、内藤辰雄、小野庵保蔵らの文章を選んで、一冊の本に編集し、自分の手で出版したのである。この本の刊行がきっかけになったのか、松尾といわば旧辻潤ファンないしは辻潤門下との交流が、その年の後半、つまり自由クラブが作られた頃から繁くなっている。

松尾が中西倪太郎、西山勇太郎と語らって駒込西福寺にある辻潤の墓を訪れたのは、その年の十一月二十四日、辻の命日にあたる日であった。松尾のその時の情景を書いた文章は、辻潤への情感に溢れていて美しい。

「昨年（昭和二十三年）の十一月二十四日が辻潤の命日だったので、僕は西山勇太郎君と中西倪太郎君を誘って、駒込の省線駅から歩いて十分ばかり先にある西福寺に辻潤の墓を訪ねた。辻潤の好んでいた銀杏の葉はまだ黄金色に染って、冷たい時雨が陰晴の定めなく頬を打つ淋しい日であった。ズボンをはいた住職の案内で我々が訪ねた彼の墓は、ひとむらの南天の樹の下に淋しく置かれた小さい四角形の石、ろひとつであり、この下に死灰が埋もれていることを印す目標である以外の何物でもなかった。住職が持ってきた線香の束に火をつけ、落葉を掃除して、この寂しく、忘れられ、見捨てられた石ころの前に菊の花を捧げた時、僕は眼底に熱い涙を感じた。附近にはブルジョアや軍人の墓がい

めしく建てられ、みじめな辻潤の石ころを冷酷に睨んでいた。これが、辻潤の愛していた祖国のそのまの正体を象徴しているのかと思えば、やたら悲しくなる。雨に濡れながら、住職はいった、

『このままにして置けばいつか無縁塚として取去られるでしょう。今年になって、誰か一人訪ねて来ましたよ』と。

西山君は雨にぬれながら、たづさえて来たカストリを石ころの上に注ぎながら、

「辻さん、さあ飲みましょう。これが敗戦後の我々を慰めて呉れる唯一の酒なんです」といった。

我々は辻さんの死灰の上で淋しくカストリを飲み、晩年の辻潤を回想した。西山君の話によると、辻潤が大往生をしたのは、昭和十九年（一九四四）の十一月二十四日の朝で、彼が最後に住んでいた、淀橋区上落合一ノ三二八、静怡寮というのは、小田原の桑原国治氏の経営していたアパートであった。このアパートの人は、辻潤の身体にシラミが一杯ついていたので誰も寄りつかず、彼の死んだ日の朝、世話をしていた婦人が彼の部屋に朝めしを持って来た時、辻潤はとうとう誰にも知られず、誰の介抱も受けずふんぞり反って冷たい遺骸になっていたという。彼の弟がかつけ、遺骸をリヤカーに乗せ、火葬場に運んだのは十一月二十七日であったが、この間の消息は、西山君以外の人々は誰も知らなかった。このように淋しい最期も、南天の下にあるこの小さな石ころも、辻潤らしいといえればそれまでであるが、友人としての我々はこの孤独者の最後の日を偲ぶとき、押つまるような悲哀に熱い涙を感じる。

辻潤は最後に戦争のさなかに生きていたのだが、酒を飲むと狂わし気に彷徨し、大声をあげて日本の軍国主統を罵倒し、『俺は共産主義者ではなく、すべてに降参した降参主義者だよ』といていたそうだが、彼の身辺にはたえず私服が尾行していた。辻さんはこの尾行をひどくうさがり、西福寺の住職を訪ねる度に不満の情をもらしていたという。

僕等はこの日、本堂に行つて住職に御経をあげて貰い（辻潤は地下でよいいなことをするなと笑っていたかも知れないが、僕等はすくなくとも彼が線香の香を好んでいたことを知っている）、年内にせめて墓標を建てようとして帰ったが、西山君の筆で『陀仙辻潤の墓』と書かれた新しい墓標が建てられたのは十二月二十五日、丁度、クリスマスまでの夕方であった。（辻潤とマックス・スティルナー）——『虚無思想研究 2』一九四九年 星光書院

越えて翌一九四九年一月二十四日、おなじ西福寺に松尾らをはじめ、村松正俊、矢橋丈吉、関根康喜、岩佐作太郎、辻まことら十一名が集まり、辻潤の墓碑建立を目ざしてすべらの会を発足させた。墓碑建立のアピールはその年の三月に刊行された『虚無思想研究 2』にも掲載されている。同書の後記を読むと「第一輯は大へん好評であった」とある。発行部数は分からないが、当時の世相に迎えられたのであろう。

『虚無思想研究 2』は辻潤と生田春月のものを除いて、すべて新原稿で、さきに引用した松尾の「辻潤とマックス・スティルナー」のほか、村松正俊、市橋善之助、小野庵保蔵、荒川畔村、大沢正道が寄稿している。村松も市橋も荒川も、その前後に自由クラブ

に加わっており、いうなれば『虚無思想研究 2』は自由クラブの準機関誌に近くなったのである。

したがって、八月に刊行された『虚無思想研究 3』の付録として「アッフランシスムの宣言」をつけたのは自然の成行きでもあった。なお、関根（彼もまた自由クラブ人であった）の厚意で、この付録の紙型を流用したパンフレットが作られ、広く配布された。それには「自由クラブ」のこと」と題する三ページほどの紹介も付され、一九四九年五月現在の「自由クラブ異人」の名簿がついている。総勢三十五名で、すべらの会の西山や中西、矢橋らも名前を連ねている。

こうして公にされた「アッフランシスムの宣言」は、一つの小さな波紋を戦後社会の片隅に投じたといつてよい。それは少数の、なにかを考えようと模索している青年たちの心を動かし、彼らを自由クラブへと吸収していった。しかし、いわゆるジャーナリズムのなかでは完全に無視されたといつても言い過ぎではない。それはまが、いものの氾濫に抗して、ほんものを手作りで生みだそうという意志の表明であったのだが、戦後民主主義のチャンピオンたちは、もっぱら「愛される共産党」のシュプレヒコールに唱和するのに忙しく、王様はハダカだと言いたげなこの宣言に耳を傾けるほどの知的なゆとりも好奇心もシンセリテイもなかったのであらう。その年の一月の総選挙で共産党は一気に三十五の議席を衆議院で確保し、「歴史的必然」の正しさが証されたかの如き幻想に、多くの人がと、とりわけ知識人や学生が取り憑かれている時期であった。

その意味では自由クラブ異人に名を連ねた人びとは、たしかに日本にとって異人というにふさわしかったのであろう。デトロイト銀行

総裁ドッジの指示で、大衆の犠牲で戦後インフレの終息が強行され、あちこちで首切り反対の闘争が激発し、それを押しつぶそうとする公安条令の施行や、労働諸法の改悪が企てられ、さらに下山事件、三鷹事件、松川事件という怪事件がつきつきに起こる不穏な情勢も、自由クラブの異人たちにとっては結局、他人事でしかなかった。火の粉が降りかかってくれば払わなければならない。しかし、火元に飛び込んで息の根を止めようとはしない、それは所詮、空しい試みである、よりラディカルに己に集中し、己の道を歩もう、というのが、言わず語らずのうちに異人たちの選んだ姿勢であった。

「アッフランシスムの宣言」が活字となり、一般に公刊されたのは八月以降のことだが、それより前、五月八日、ですべらの会と協力し、星光書院の後援で開かれた辻潤を追悼する「虚無思想講演会」でも公にされている。文化学院講堂で行なわれたこの講演会には、百から百五十人ぐらいの聴衆が集った。「虚無思想研究」などの広告もかねて、講演会のポスターは水道橋通りや駿河台通りの電柱などにかなり沢山貼りだされたが、聴衆はそう多くはなかった。この種の講演会が人気を呼ぶようになるのは、六〇年代に入ってからである。それまではごく少数の、あまり氣勢のあがらない、しみりした会になることが多かった。

演壇に立ったのは、村松、市橋、松尾、新居のほか、武林無想庵や辻まことも辻潤の思い出を語ったが、出色だったのは高橋新吉で、虚無思想などという奴は自分はバカだというようなものだど毒づき、お経をよんだり、辻潤が好んでいた唄を歌ったり、最後にははいていた下駄を脱いでテーブルを叩き、下駄を割ってしまうという始末であった。この立居振舞は高橋を知らぬ青年たちの度肝を抜

いた。
なお、高橋はこの講演会について、後日、『無定型』で次のように悪態を吐いている。

「……辻の長男の一君も来ていた。自分も指名されて壇上に立った。お経も終りまで云へず、辻潤の好く歌った唄もよくうたへず、下駄を脱いで卓子を叩いて下駄を割ったが、それから壇を降りてから階下の便所へ行って三十分か一時間ほども跣んでいて、気がついて会場へ又引きかへすと帽子と、此の日売らうと思つて薬用練麴磨を仕入れて来たのを箱に入れて持っていた袋が、そこに放り出してあつて中味は一つも無くなつてた。村松氏は帽子を盗られたといふ。他人の財産は自分の財産のやうに思っているアナキストの連中が聴衆の中にもいて、石川三四郎氏は姿を見せなかつたが、矢橋文吉、大沢正道、大木静雄などの顔も見た。どうもうっかりしていて、おまけに頬をコンクリートの壁に打つて少しすり剥いたりしたが、散々な目に自分は遇つた。……」

当日の講師には仲間うちということから謝礼は払われなかつたが、その辺にも問題があつたのだろう。文中で矢橋、大沢らと泥棒呼ばわりされた大木静雄の「ひとのものはひとのもの」(『自由クラブ通信』7号 一九五〇年三月)は、この件について渋く反駁を試みている。

自由クラブにとって最初の公的活動であつたこの講演会は、幾人かの新しい仲間をこしらえた。このような時世なればこそ、アッフランシスムに共感する人びともまた皆無ではなかつたのであろう。そのことの確認から、幾度か議論になりながらなかなか実現するにいたらなかつた機関誌も漸く発行の運びとなつた。

『自由クラブ叢書』が一号で沈没したことはさきに述べたが、その後、集会の折の研究発表を印刷した『自由クラブ通報』が、やはり手作りの謄写版で二、三回出されている。第一号は、三月十日の会合で松尾志呂生が話した「仏教について」の要約、第二号は三月二十九日発行で、佐藤の「キエルケゴールについて」が載っている。B4判(いわゆる藁半紙の大きさ)一枚で、ごく簡単なものだが、それも長くは続かなかつた。

刊行物の発行はなかなか持続するにいたらなかつたが、集会の方はアン・リネル研究会以来、会場探しに悩まされながらも、ほぼ月に一、二回は欠かさず開かれてきた。その中身は講読から研究発表、ディスカッション、放談、カストリ・パーティにいたるまで、まちまちであるが、自分の家を出てどこかに集まるそのことのうち、このクラブの生命があつたのであろう。集まりが間遠になり、集まりよりも刊行物の方がコンスタントに出るようになった時、その生命は消えたのである。

一九四九年八月、いうなれば三度目の正直で、機関誌『自由クラブ通信』が創刊された。編集にあつたのは主として川崎覚太郎で、謄写印刷だが手作りではなく、川崎や大沢の友人で、謄写印刷をやっていた江藤正夫の孔版社に依頼したものであつた。B5判八ページ、5号までは表紙にウナムノ、アン・リネル、レミ・ド・グールモン、ニイチエ、ラ・ロシュフコオのアフォリズム風の短い言葉を掲げていた。この人選からも自由クラブの嗜好を窺うことができる。

『自由クラブ通信』は途中一時抜けたこともあるが、だいたい月刊で、一九五一年一月までに十三号を発行し、『アッフランシ』にバ

トンタッチした。内容は大別して四つに分けられる。評論と随想と翻訳と報告である。報告の記事をたどっていくと、自由クラブが東京だけでなく、全国各地に拡がっていく様子がよく分かる。

第3号の「自由クラブニュース」には、「ニヒリズム研究 3に発表されたアッフランシスム宣言が大分反響を呼んで、地方からぞくぞく参加の申込みがある。広島、大分、三重、静岡、長野、福岡、北海道等々に自由クラブ人が散在するようになり、浜松ではすでに十名の共鳴者を得、浜松自由クラブが作られる模様」とある。浜松は松尾の郷里金指に近く、いわば地元であつた。

また第4号には、宮城県気仙沼町に自由クラブの出来た記事がみえる。「宮城県気仙沼町では、かねてから菅野青顔氏を中心に気仙沼自由芸術協会が作られていたが、十月二四日に辻潤の追悼記念会をやり、松尾氏を招待して講演会を開催した。この機会に菅野氏外自由芸術協会員三十二名が、自由クラブに合流することになった」。菅野青顔は戦前からの辻潤のファンで、気仙沼町立図書館長であつた。辻潤は放浪の途次、二度ほど菅野宅に滞留しており、菅野は戦時中、二十数冊の辻潤の著作や書画、書簡などを篠のカバンに入れ、それをわが子のように抱えて逃げ回っていたという。よほどのファンでなければできないことである。

浜松自由クラブの結成、気仙沼自由芸術協会員三十二名が合流……などと記すと、自由クラブはあたかも上昇気流に乗ったかのようにみえるかもしれない。たしかにクラブの輪は拡がっていったが、その拡がりばかりならずとも質のたかまりに正比例するものではなかつた。気仙沼自由芸術協会の書記役を勤めていた熊谷竜平の「気仙沼だより」(『自由クラブ通信』7号 一九五〇年三月)は、その間

の消息を率直に伝えている。

「兄も御承知のように、僅か三十名そこそこの会員を持つ会でも、ひとりでやるとなるとずい分煩瑣なものです。一番会費集めが大変です。今までは例会の都度案内状を印刷して配ったのですが、顔ぶれだけ揃ったところで酒を飲むだけの話なので、酒を飲まない人などはいや気がさして来た様子ですし、中心となる連中も気疲れにつかれるばかりなので、これも又面倒臭くなり、近頃では特別の場合の外は通知を出さないことにして、辻先生の命日を忘れないで、仲間の集りを楽しみにして居る者だけが、自然な気持で集るようにしましたので、一月の例会日にはたった四名という盛会ぶりでした。……」

思想の友というものは仲々得難くそして少ないものです。三十名の会員を持つ気仙沼自由芸術協会ですが、思想的につながりを持つものは僅かに数名といった、寥々たるものです。それが当然だと思っただけから、別に淋しいとは思いませんが。……」
この悩みは必ずしも気仙沼の熊谷だけのものではなかった。その頃、東京の自由クラブでやはり書記役を買ってでいた大沢の日記にも同様な悩みが記されている。

「九月二十七日（一九四九年）」

自由クラブをどうするか、こんなことをどこへ行っても聞かれる。どうするって、なるようにせよがいい。これがいつもきまってるのぼくの答えだ。

いろんな人が集ってその人が互に成長し、楽しみ、自分のことばでなにかをしやべれるような機会と雰囲気を作っていくこと、そういう人間関係を作っていくこと、これが自由クラブの目的だ。

し、仕事なのだ。……」

「十月三十一日」

雨野と論争、誇大妄想の不平家の集りには全く厭になる。相も変らぬ、クラブをどうするということが、どうにでもなるがいい。やりたいようにやるがいい。ぼくはもうこういう不平家と一緒に仕事をするのは真平だ。ぼくらは口でがやがや言うより、まず出来ることを黙ってやらなくてはならない。それでこそ本当にお互に気持よく仕事ができるのだ。なんにもやらないで不平ばかり言うことは惨じめな自己満足だ。なけなしの材料を使って作ったごちそうをいきたなく食い散らして、やれそれと悪態を吐かれたコックのような気持がする。会合がきちんと開かれていたのだから、雑誌が続いているのだから、ぼくが方々連絡して歩いているからだ。もしぼくが動かなかつたら、会合一つ開けはしまい。それはなんにもぼくの自惚れだとは思わない。ぼくが献身的だということは誰が見ても明らかだ。やればやるだけ文句をつけられるなら、やらない方がましである。

実際、今度という今度はぼくも腹が立った。自由クラブなんてどうだっていい。小股すくいのようなことばかり言い合って、それが一体なにになるというのだ。もつとぼくらは協力して、一つの仕事を続けてゆかなくてはならないのに。

日本というところでものをとする絶望を感じる。」

日記はあるひとつにとってはカタルシスの場合である。胸のつかえがおりてしまえば、あとはさっぱりする。大沢の場合がそうだったかどうか、定かではないが、その後も彼は時折ヒステリックな言辞を日記に叩きつけながら、自由クラブの実務を背負っている。やはり

それだけの魅きつけるものが自由クラブにはあったのだろう。

『自由クラブ通信』には最初のうち、いずれも小篇だが、なかなか意欲的な評論や作品が掲げられていた。「叛逆か革命か」（松尾邦之助）、「くすんだノート」（雨野一雄）——以上1号、「林茂の手記」（松尾志呂生）——2号、「ナルヴィックの思ひ出」（佐藤豊）、「メガネ談義」（上原利夫）——以上3号、「これすばんだんす」（市橋善之助・大沢正道）、「赤いスフィックス」について（松尾邦之助）——以上4号、「世界諸精神の出自」（佐藤豊）——5号、などである。ところが、6号以降、この種の小篇は姿を消し、もっぱら「クラブ人の消息や感想、クラブの動き」などが掲載されている。その間の事情は、6号の後記に明らかである。「待望の思想発表の機関として『自由の探求』を持つようになったので、『自由クラブ通信』は会報としての本来の役目を果たすことになった。これからはクラブの消息や感想、クラブの動きなどを主として掲載してゆきたいと思っている。クラブ人諸君の思想を『自由の探求』に寄せられると同時に、消息や動静を『通信』に御知らせ願えれば幸いです」とある。

『自由の探求』発刊の呼びかけも、おなじ6号に載っている。

『虚無思想研究 2』が自由クラブの準機関誌に近くなったことはさきに触れた通りだが、『虚無思想研究 3』はさらにその性格を濃くしている。「アッフランシスムの宣言」が付録としてついているほか、寄稿者も石川三四郎、武林無想庵を除いてはすべて自由クラブの会員であり、石川もその後会員になっている。一方、自由クラブでは『自由クラブ通信』を発行しているものの、B5判八ページという誌面は会員の思想発表の場としてはあまりに貧弱であった。しかるべき発表の舞台を、というのは大方の希望だったのである。

『自由の探求』はこの希望に添って計画された。『虚無思想研究』は三号で打ち切り、それに代わって『自由の探求』と題する書物を年四回、定期的に出そうというのである。経営は星光書院が引受け、編集は自由クラブがあたり、ということに話はまとまった。それは大方の希望を充たすのに余りあるほどの計画であるはずだった。

しかし、『自由の探求』は当初の予定より約一年おくれ、一九五一年四月に『虚無思想研究 4』を副題として刊行されたとき、あとは続かなかつた。おくれた理由はおもに星光書院の経営の状況、とりわけ用紙事情の悪化にあったようだが、しかし、漸くにして刊行された第一号の内容は、『虚無思想研究 4』を副題とするにふさわしいものだった。寄稿者も佐藤豊、坪井良一、菅野青顔を除いてはこれまでと同じ顔ぶれであり、面目一新というには程遠かった。かりに経営が順調だったとしても、この調子では年四回は愚か、年二回でも充実した内容で刊行するのは困難であつたろうとおもわれる。B5判八ページは貧弱にすぎたのである。その結果、折角芽生えはじめた自由クラブ人の表現活動が育たずに終わってしまったのである。

ところで、先に触れた辻潤の墓碑建立の事業についてもここで述べておかななくてはならない。というのは、墓碑建立を目ざして作られたすべらの会の幹事の中川敏夫が一時蒸発するという事故が起これ、この仕事の大半を自由クラブが担う破目となったからである。墓碑建立のための寄附金の呼びかけに対して、谷崎潤一郎のように、「生前あれだけ迷惑をかけておきながら、死後また迷惑をかけるつもりか」と言って断った例もなくはなかったが、それはむしろ

例外で、予想以上に多く人びとの支持があった。おもな寄附者は、三千円 関根康喜、百四十円 土居貞子、百円 斉藤昌三、百円 尾山始、五百五十円 高村光太郎、千円 氣仙沼自由芸術協会、三百円 小川未明、五百円 高田保、二百円 相馬御風、百円 添田知道、百円 原文志、百円 佐野孝、五百円 大木惇夫、千円 西山勇太郎、三百円 新居格、五百円 中西悦太郎、千円 松尾邦之助、百円 津田光造、五百円 小野庵保蔵、百円 山内ガラン洞、三百円 村松正俊、五百円 森谷均、百円 草野心平、三百円 山本実彦、五百円 市橋善之助、二百円 矢橋文吉、等々で、総額一万六千九百四十六円に達し、墓石と彫刻の代金はともかく支払うことができた。

墓碑は自然石で、地上の高さが約三尺、表に「陀仙辻潤の墓」、裏に「昭和十九年十一月二十四日没 ですべらの会 自由クラブ有志一同」と彫り込まれている。文字は西山勇太郎の筆である。西福寺住職花園有連の好意で、玄関の右手、門を入ってすぐの場所に建てられた。

十一月二十四日、墓の完成記念と死去五周年を兼ねて西福寺で催された辻潤を偲ぶ会の模様は、『自由クラブ通信』6号（一九五〇年一月）に載った「陀仙辻潤の墓のこと」に記されている。

「当日は午前中、アレン台風の余波で雲低く、雨もパラつくうつとうしい天気であったが、午後になってから北風とともに分厚な雲も漸く切れ始め、薄日が出るようになってきた。辻潤を偲ぶ会は三時より開かれる予定であったが、昼すぎよりつきつきに参会者が集り、藤枝からは辻潤門下の三哲の一人「カサ哲」こと、内田庄作氏や辻潤の兄さんに当たる辻義郎氏、義弟に当たる津田光造

氏、飲み仲間の一人だった長谷川秀二氏、小田原からは当地在住の有志を代表して、ひげを勇しく生やした山内ガラン洞氏ら、賑やかに思い出話に花を咲かせる。

会はまず発起人の一人として松尾邦之助氏の挨拶に始まり、去る十月二十二日に死去した卜部鉄心氏の追悼もこの機会にかねて、と諮れば一同賛成、石川三四郎、原文志、関根喜太郎、添田知道ら諸氏がつきつきと起って辻潤、ウラ哲の思い出話を話される。そのうちに酔が回ってきたのか、茶々をいれるもの、まぜつかえすもの続出し、大木（一）君が辻潤の体臭に親しみを感ずる老人連とその仕事に関心をもち青年組の中間に挟った苦境を述べる時分には、あちこちで勝手なおしゃべりが始っていた。

五時すぎに読売新聞が記事採集に訪れたが、それを機会に一部の人は酒を買い、改めて二次会に移った。一度、二度、金を集めては酒を買い、思い出深い歌が次々と歌われ、騒ぎが絶頂に達した頃、ひょっこり高橋新吉氏が表れ、一層賑やかになった。三笑会の伊藤君が酔払って豆をやたらに投げたり、内田氏がお山の大将ぶりを発揮したり、高橋氏が例によってパイプがなくなったと、アナキストを泥棒視したり——もともとパイプは高橋氏のポケットに納っていたのだそう——異常な雰囲気の中に散会したのが九時すぎであった。

この日、西山勇太郎氏、小野庵保蔵氏がいづれも御病氣のため出席できなかったのは実に残念であったが、墓に花を飾るでもなし、線香の一本を建てるでもなし、ましてお経を読むでもない、この『追悼会』に辻潤もさぞ喜んだことと思われる。」

当日の出席者は三十九名であった。

いまになって振り返ってみると、辻潤の墓碑建立の報告や、『自由の探求』発刊の予告を載せた『自由クラブ通信』6号は、自由クラブの運動の一つの区切りになっているようである。それまで月刊で刊行されてきた『自由クラブ通信』も、それ以後、3月に7号、5月に8号、7月に9号、9月に10号、11月に11号という具合に隔月刊となり、ページ数も4ページの号が多く、内容も翻訳ものがふえ、評論で目につくのは「ある問答」（大沢正道）——11号、「J・H・マッケイの文学的作品」（松尾邦之助）——12、13号、くらいである。定期刊行物で翻訳ものの占めるスペースがふえるのは、発行主体の創造力の衰えを物語っているといつてよい。

自由クラブ運動のもう一つの柱であり、刊行物以上に重要な位置を占めていた集会の方も、内容的には低調に向かっていた。たとえば、一九五〇年二月十日に開かれた東京の第四十五回定例会合の様子は、『自由クラブ通信』7号によると、こうである。

「二月の定例会合は前回と同様、蔵前工業会館の日本間で、十日に、五時から開かれた。

当日のテーマは『無抵抗主義、一その歴史、二その形態、三その未来』という厳しい前触れであったが、蓋を開ければ、無抵抗主義についての討論ではなくて、無抵抗主義の実践というところ、みな討論にのっけから降参したとみえて、いろいろ松尾氏から討論のネタを提供されても、一向手答えなく、おまけに『無抵抗主義の御本山』市橋氏が欠席で、焼酎が振舞われたので、がやがやわやわの雑談のうちに、頗る後味悪く終わってしまった。

松尾氏も一向に反響のないに手を焼いたのか、『東京無宿』（映画）の批評となり、主人公の弱々しい無頼漢ぶりに反対、な

ぜあんなにびくびくなのかと憤慨し、あれは『こんな女に誰がした』と同じじめじめした心理だといえ、辻さん、それが日本のセンチメンタリズムだと断定する。

また最近復活した格闘や殴り合い映画や小説について、辻さん、こういうものが受けるところに日本のファッショムの温床があると云うなど、終いには松尾氏のドブに落ちた失敗談まで持ち出したが、所詮無抵抗主義者にはぬかに釘、とうふにかすがいというところ、ばりばり南京豆を喰べちらし、はい、さようなら、というわけ、まことに困ったものですねえ。

出席者 松尾（邦） 上原 山口 辻 渡部 斉藤 田戸 江口 女屋 徳波 中道 松原 小川（幸） 関根 川崎 雨野 矢橋 大沢」

この記事の筆者は大沢であり、彼一流のバイアスがかかっているともみなくてはならないだろうが、お世辞にも充実した内容とはいえない。しかし、それでも集会を開けば、常時、十七、八名の参会者はあった。

その頃、集会に参加した者の大半は二十代の青年だったが、自由クラブへの期待は大きく分けて二つにしばることができ。一つは真面目グループで、なにか自由な思想を学び取ろうという希望をもっていた。彼らは研究発表やディスカッションを求めている。もう一方はダベリ・グループで、酒を飲みながらの自由な雰囲気ひたればそれで満足であった。七面倒な議論は好まなかった。この水と油の要求をどのように満たしていくか、いろいろな試みが企てられたが、落着く先は両者を分離することであった。

『自由クラブ通信』9号をみると、「四月十八日 自由クラブが

気の抜けたビールのように、甚だ收拾がつかなくなって行くので、従来の方針を一擲して小講演会兼座談会を毎月一回行い、外部に呼びかけて自由人の発掘、紹介に集中することになった」とある。それに合わせて、七月から第二、第四の水曜日に、有楽町のシミズで自由集会がもたれることも報じられている。——「いわば自由クラブの溜り場、気が向いたらいつでもぶらりと行けばよい。きっと誰かに会うだろう。会ったら大いに論ずるべし。酒でもコーヒードも自由、但し会計は自分持ち。」

有楽町のシミズは、有楽町駅東口に立ち並んだバラックの飲み屋街の一角にあった。狭い階段を上っていくと、うなぎの寝床のように細長い二階がある。そこに三つか四つテーブルが置いてあった。おそらく松尾の顔で使えるようになったのだろうが、自由クラブ人が気焔をあげるにはもってこいの場所であった。終電近くまで談じ込む姿も時にはみられ、このシミズでの集まりは断続的ながら二年近く続いたようである。

自由クラブが中だるみで、新しい運動の糸口を模索していた頃、朝鮮半島では戦端が開かれ、それをきっかけにして戦力なき軍隊が創設され、レッドパージの波が襲いかかり、国の内外は激しく揺れ動いていた。時代に超然としているのが自由クラブの特徴であり、また誇りでもあったが、『自由クラブ通信』を活版に切り換え、『アフラシ』としてスタートすることになった契機の一つは、どうもこのかまびすしい世間の動きであったようだ。

「市橋善之助、石川三四郎、大沢正道、菅沼五十一、辻一、川崎寛太郎、西村伊作、新居格、松尾邦之助、村松正俊後自由クラブ異人一同」の名前で出された『通信』を活版にするために」の呼び

かけには、朝鮮戦争下で形式的な自由すらも脅かされていると感じた自由クラブ人の心情と、戦争と恐怖政治に前途の希望を奪われようとしているが故に、希望を創り出さなくてはならぬとする決意とが、よく示されている。

この呼びかけは一九五一年一月、『自由クラブ通信』の最終号で行なわれた。そしてそれから三カ月経った四月に『アフラシ』第1号が世に送り出された。おなじB5判で四ページ、一部十、半年六十円、一年百二十円、印刷は白井新平の厚意で、彼の経営する競馬新聞『競週』の印刷所が引受けてくれた。そこにはクラブ員の田辺一夫、所貞夫が勤めていた。刷部数はたしか千部で、題字を書いたのは辻まことであった。

恒例の「自由クラブ異人」の名前が一九五一年二月現在として列記されているが、その数は気仙沼や浜松の自由クラブ人を加えて、九十一名に達している。『自由クラブ通信』創刊号の時は三十五名だからちょうど二・六倍、数の上ではふえた勘定になる。

しかし、第1号に載った松尾の『アフラシ』再出発の辞」を読むと、『アフラシ』刊行の直接の動機は、フランスの個人主義的アナキストのグループ「リュニーク」(唯一者)と機関誌の交流するべく、「ガリ版の通信を送ってやったが、国際的に紹介すべくこれではあまりに汚い」というところにあったように書いてある。これは、大沢がさきに書いた『通信』を活版にするために」の呼びかけの内容と大ぶかけはなれている。松尾の「再出発の辞」は、彼が『自由クラブ叢書』の創刊にあたって書いた「自由クラブ叢書発刊に際して」と、大同小異である。この一貫性は一面見事というはかないが、外部の状況に敏感に反応する一部の人びとにとっ

てはマンネリズムとも映ることがあった。『アフラシ』が創刊された一九五一年春以降が、自由クラブの最も量的には大きくなった時期であるが、それはまた内部の矛盾があらわになりはじめた時期でもあった。

『アフラシ』の編集、発行にあたったのは実質的には大沢で、田戸栄や田辺、所が協力した。試みに最初の数号の目次を掲げてみよう。

◇第一号(昭和二十六年四月一日発行)

「アフラシ」再出発の辞 松尾邦之助／自由人の一断想 村松正俊／フリーダムとリバァチー 新居格／期限付国土交換法 佐藤豊／文芸春秋と 情性の祝典 大沢正道

◇第二号(一九五一年五月一日発行)

自由人の自己訓練 松尾邦之助／「庶民」と「人民」 土居貞子／単にウラガエシにすぎない(戯画) 辻まこと／文化を知らぬ文化人 黒田栄三／当世書生氣質・道具 田戸栄／武蔵野夫人雑感 大沢正道／生田春月の思い出 石川三四郎

◇第三号(一九五一年六月一日発行)

生活態度の革命 石川三四郎／マラテスタの言葉／文学以前 佐藤豊／世界の村趣意書／書評『思想の自由の歴史』 大沢正道／二つの自由への途 松尾邦之助／翻訳四十年の誤謬 大沢正道／宮島さんについて 秋山清／世の奥さんに捧ぐ(戯詩) 北狂介

◇第四号(一九五一年七月一日発行)

自由人の処世観 西村伊作／アフラシの目指すもの大沢正道／わが世、わが光 市橋善之助／「異邦人」を読んで 所貞夫／アフラシ寄せ書集／書評『私の個人主義』 大沢正道／亡くな

つた革命詩人たち 村松正俊／女(詩) 後藤一夫

◇第五号(一九五一年八月一日発行)

アフラシにも倫理がある 松尾邦之助／デカダンス 大沢正道 自由の勝利者 大久保二郎／虚空 ところろさたを／書評『戦後派』 大沢正道／社会は個人の敵? 松尾邦之助／アフラシ・デー報告／徳富蘆花 石川三四郎／聖書とは(戯詩) 北狂介

◇第六号(一九五一年九月一日発行)(八ページ)

特集Ⅱ各世代の見た日本人 私の日本人観 石川三四郎／明治時代の日本人 新居格／日本人の盲点 細田源吉／諦めの美德人とアフラシ 松尾邦之助／非アナキストの言 白井新平／四十代の日本人 植村諦／拙い絵を描くピカソ ハーバート・リード／俳句四句 福田正夫／日本人の顔のこと 大江満雄／書評『ヨーロッパ紀行』 大沢正道／不安定勢力への模倣／佐藤豊／愚問に答える 辻まこと／文化を持たない日本人 大沢正道／されこべの杯 バイロン／この国の人について 江口幹

B5判四ページないし八ページの小さな誌面から内容が溢れ出ている、といったら過褒になるかもしれないが、自由クラブで刊行した機関誌のなかでは、『アフラシ』が最も充実している、といつてよい。一九四七年六月に五人のメンバーで発足したこのグループは四年間でここまで成長したのである。世田谷の松尾宅で語り合われた、「われわれの周囲に十人でも二十人でも、真に自由を解し、思想を語り合える友人を集めよう」という夢は、内実はともかく形の上では実現をみた。この年の六月二十三日に文化教会と共催で、文化学院講堂で開かれたアフラシ・デーの催しは、自由クラブの成長の頂点だったのである。

しかし、アフランシ・デーについて書くまえに、『アフランシ』3号で紹介されている「世界の村」について触れておきたい。このような愉快で先駆的な試みについて、いまとなつてはだれも記録にとどめるものはいないだろう。

この集りがいつ、どういう動機で始められたのか、確かではないのだが、一九五一年一月二十六日に、大森の松尾宅で「何となく集る会」あるいは「人間の会」と名乗る会がもたれた。この会の名はいずれも新居格がつけたもので、察するところ晩年淋しかった新居を励まし、慰めることが一つの隠された動機であったようにも考えられる。新居はその年の五月に脳溢血で倒れ、十一月十五日に没した。もともとは会自体は年に一、二回、その後も開かれていた。

会する者は松尾、新居のほか、石川三四郎、村松正俊、小牧近江、大沢正道の六名で、大沢はその折の印象を日記に次のように書き留めている。

「二六日は松尾さんのところで新居さん唱えるところの人間の会、村松、石川、小牧さんらに末席にぼくと都合六人の会合、いろいろ思い出話やらふんまんやらが吐かれた楽しい会だったが、概して低調、もう自由クラブで耳にタコがつくほど論じられ、むしろかえされた議論のむしろ返しでしかない。」

と、なかなか手厳しい。この時かその後か、読売の記者が取材に来たことがあったが、記事にはならずにしまいであった。

「世界の村」Village Universalの構想がこの一月二十六日の集りの際にでたのか、あるいはそのあとのことだったのか、これも茫漠としているが、発案者は小牧近江であった。その頃、朝鮮戦争を背景にしていわゆるストックホルム・アピールが行なわれ、わが国

国家や民族に未練をのこす秩序は十分なものではありません。

でわれわれはコスモポリタンの立場をとります。世界中の心ある人々と精神的なつながりをもつことをわれわれの夢の実現の第一歩と考えたい。なぜなら、個人的な接触と理解とがすべてに先立ちますから。そして地球のどんな隅にいても歌える青天井の歌「世界の村」を作つてこの友情を一そうかためたいと思います。われわれの心からなる友愛のしるしを送り、あなた様の好意あるお返事を待ちのぞみます。」

この趣意書の討議は例の有楽町のシミズで行なわれた。新居がシミズの狭いイスに窮屈そうにすわり、あの独特の口調でしゃべった姿はすこぶる印象的であった。

松尾がそれを伝訳し、英訳も松尾の知人を煩わしてすめられた。パール・バック・アインシュタイン、ヘルマン・ヘッセ、サルトル、ピカソ、ラッセルなど、各国の錚々たる知識人にこのアピールを送ろうと話合っている間がどうやらこの試みの花であったようだ。実際にアピールされたのかどうか不分明だが、どこからも応答がなかったことだけは確実である。夢はついに夢だったのかもしれない。

『自由クラブ通信』の際もそうだったが、装いをあらたにして機関誌が出されると、それが刺激となって運動が盛り上ってくるものである。『アフランシ』が創刊された時もそうだった。

たぶん一九四九年五月の虚無思想講演会の頃からクラブ人となつた清水康、中道喜悦ら新しい世代が、この盛り立ての主導力であった。一九五一年五月十九日の大沢の日記をみると、「自由クラブを拡張しようというので清水君らが盛んに奔走している。どれほどの

の進歩的文化人たちがこぞつてそれに賛成の署名をしたり、あるいは世界文化自由会議のアピールが行なわれ、それにはリベラリストや保守主義者が呼応するといった具合で、国際的なアピールが一つの流行になつていた。しかし、いつも外国からアピールされ、働きかけられているだけではなはだ情けない、一つわれわれから世界の文化人にアピールしようではないか、というのが発案の趣旨であった。

新居格の筆になる趣意書は、いわば戦後最初のユートピアの提唱といつてよいだろう。それが「世界の村」と名づけられたところに、この構想の新鮮さがある。

「世紀のかがやける良心であるあなた様に夢を封入したわたし共の挨拶を送ることはうれしいことです。」

われわれの前には戦争の悪夢と恐怖の翼が拡がろうとしている。物をいう自由は窒息しようとしています。それだけに考える自由、夢みる自由を一そうつよく把握しなければならぬと存じます。そこでわれわれは『世界の村』のデッサンを描こうとするのです。

世界の人々が、民族、宗教、国境を超越して小さな村の人々の善意と理解と平和と親睦の生活が可能な境地！

『世界の村』の人々はカンパネラが「太陽の都」で描いたように、宗教や性や人種の差別もなく、オネートムであり、コンモンマンの寄り集りで、正直、勤勉、自由と清潔とを標章とする働くことを尚ぶ人々です。そして平和に、幸福に美しい集団の生活をする村であり、また、支配する国も、支配される民族もない人類の植民地でもあります。

成果があがるか分らないが、ともかく動いてくれる人がでて来たのは嬉しい。／知名な自由人を包含すること、それから仲間を殖やしてゆくこと、定例の講演会を開くこと、これは文化教会と結んでその一回分を貰うことにしてもいいかもしれない。アフランシを充実し、別に自由クラブ叢書といったパンフレットを発行してゆくこと、計画はいくらでもある。金さえあればいくらでもやれることだ。(……)／無理をしてはいけない。力の限界を知つてその限界のなかで充実したものにしてゆくこと、これがいままでの多くの運動方針だった。その方針に変わりはない。／ただ清水君達、若い人達が協力してくれるようになって、力の限界がいくらか拡張されたのだ。それ故、それに相応した運動をしてゆかなくてはならない」とある。

清水たちはまず、知名な自由人と目される人びとを訪問して、その支持を求めたりした。『アフランシ』4号の「記録と消息」欄では、「深尾須磨子、高橋新吉、北川冬彦、金子光晴氏らを始め多くの共鳴者、協力者を発見している」と記されている。知名の人びとのすべてが詩人であるのは、もともと清水が詩人志向だったからであらう。

六月二十三日のアフランシ・デーは、このような盛り上りのなかで開かれ、文化学院講堂がほぼ満席になる、という盛会であった。司会は大沢がつとめ、最初に清水がアフランシ宣言のうちのいくつかを朗読、ついで講演が行なわれた。石川三四郎「アフランシについて」、村松正俊「忠良なる臣民から雲助の手先へ」、松尾邦之助「アフランシと五笑会」、高橋新吉「詩人とお経」、西村伊作「私のみたアフランシ」の六名で、ほかに深尾須磨子も登壇を予定されて

いたが、事情で来れなかった。

出席していた大江満雄が「こんな愉快な集りは少ない」と感想を述べていたが、適度に真面目で、適度にユーモラスな雰囲気があった。講演のあとの放談会には約半数、百名近くの人びとが残ったが、数名の馬占山の存在（一聴衆の印象）のために会話が混線し、それに時間も少なく、いささか後味の悪さを残した。それでも、その場で七名の入会者があった。もっとも収入はわずかに四百円、前回の虚無思想講演会で二千円近く集ったのに比べて少なすぎる、と大沢は日記で嘆いている。

『アフランシ』では毎号誌上で新しくクラブに参加した人たちの名前を列記しているが、アフランシ・デーの報告を載せた5号までに、犬田卯、岡山俊吉、山口英、近藤道夫、森本哲郎、渡辺恒雄、土居貞子、飯森和夫等々三十八名があがっている。そのうち三分の一余りが若い女性である。また、地方では飯田喜久らの三島自由クラブ、西山又二、浜川博らの長崎自由クラブの結成が伝えられている。

しかし、6号以降、新クラブ人の紹介やクラブの動静の記事はみられなくなり、7号には次のような社告が出ている。

「経営上の都合により、アフランシは新にアフランシ社より発行することに致しました。従前通り御愛読をお願い申し上げます。なお次号より誌代未納の方には発送を停止致しますから、至急誌代を納めて下さい。一九五一年十月一日」

『アフランシ』の創刊以来、クラブ人が急増しているのに、経営が苦しくなり、発行所を自由クラブからアフランシ社に移すというのは、不可思議なことといえるかもしれない。アフランシ社といっ

ても、べつに定款などを設けて新組織をこしらえたわけではない。そうではなく、要するに自由クラブの機関誌であることをやめ、独立のリーフレットとして発行していくこととなったにすぎない。それはある意味では編集、発行に初めから当たっていた大沢ひとりに任された、ということでもあった。あるいは大沢が自らそれを買ってでたといってもよいかもしれない。

そのようになってしまったことには理由がある。それは自由クラブ内部の小さな内紛である。内紛のきっかけは清水や中道らと、松尾との争いであった。清水らが精力的にクラブ人の獲得に奮闘し、それなりの成果を挙げたことはすでにみてきた通りだが、量の拡大は必ずしも質の充実を伴わず、つねに慎重派の大沢などは、清水らのやり方にいささか批判的であった。五月三十一日の日記で、大沢は「もし自由クラブが宣伝だけのチンドン屋か、運動のために献身的に奔走することを要求するようなとてもないものになってゆくなら、ぼくはあっさり手を引くだろう」と書いている。

松尾はもともと派手好きであり、大沢の慎重論に反対で、以前も時折そのことで大沢と論争したくらいだから、清水らの積極策に賛成であった。現に何人かの後輩に当たる読売新聞記者を、自由クラブに勧誘している。しかし、清水、中道らが積極的に活動するにつれて、松尾との間の思想上の溝が次第に広がってきた。この溝が穿たれた原因は、いまにして思えば主として世代的なものであった。

最も若い世代である清水らは、当然、思想の純粋性を強調し、自由や自我をとことんまで追求することを求めた。彼らの若さは、その追求が世間という壁にぶつかり、はねかえされる怖れに気づかなかった。観念の世界では、世間という壁はひらりと飛び越えられる

べきものはずであった。彼らはそこから、読売新聞副主筆という、見方によれば最も世間的なポストにいる松尾の「世間との妥協」を不純と感じたのであろう。

感情の振幅が激しく、世代的な配慮に欠け、二十代の青年に対しても同年輩の友だちに対するのとおなじようにむきになって論争する松尾は、清水らの挑戦に憤激した。この気質は彼のすぐれた面でもあるが、一つの運動のリーダーとしては不向きであった。そのため折角彼に魅かれて集ってきた青年たちを、みずから引き離していくことが、これまでも何回もあったのである。

松尾の憤慨は、『アフランシ』8号に載った彼の短文「妄想の自由とぐうたら自我人」のうちに表現されている。彼はこの短文のなかで、自由クラブ異人の間に対立が生じたとし、「その対立は、自由人でない自我人、つまり何物をも犠牲にしないエゴ的自我人と、社会との接触を考え、自由を現実社会の中に把握しようとする自由人との間に生じた運命的対立である」と述べている。

松尾はさらに「自由人でない自我人」を「ぐうたら自我人」ときめつけ、それは「時に半狂人であるか、親のすねかじりとして生きられるめぐまれた個人である」と皮肉り、「ぐうたら自我人は、己のぐうたらを理論づけようとして、常に彼等の自由に対するイリュージョンと偏見の虜となっている。イリュージョンに捉われている彼等は、自由だと妄想しているだけである」と論じ、最後に「ボク等の望みのは安易な妄想の自由でなく至難で戦いとする現実の自由である。自由クラブが若し方向を示すべきだとすれば、こうした自由への途であり、その為の思索と行動でしかない。異人の集りではあるが、ぐうたら、の妄想人を相手に貴重な時間をつぶしたくない」と

結んでいる。

大沢ら中間の世代もほぼ松尾に同調し、清水、中道らはその年の秋に自由クラブを去っていった。

けれども内紛はそれだけにとどまらなかった。『アフランシ』4号に、五月九日、東京自由クラブの集会の折に集められた寄せ書が載っているが、そのなかで上原利夫は「固苦しい表現で観念的なことを云々するよりも、緊急の問題、例えば講和とか再軍備問題などについて、はっきりした態度を示して欲しい」と要望している。上原は自由クラブ発足当初から最も非政治的なタイプの文学青年であったが、この年の九月四日に調印された講和条約をめぐる論争や、それに伴って本格化した再軍備のような政治問題が、彼にこうした発言をさせたのだろう。そしてそれは必ずしも上原だけの要望ではなかったはずである。

『アフランシ』の発行所の名義を自由クラブからアフランシ社に変更した7号の一面で、「アフランシは現状をどうみるか？」と題する、当面の政治問題についての逐条的な態度表明が行なわれている。「アフランシは講和条約及び安全保障条約をどうみるか」「アフランシは再軍備に反対するか」「アフランシは共産党の弾圧に賛成するか」等々八つの項目をたて、それに簡明な解答を与えた無署名の記事だが、筆者は大沢であった。

大沢はその次の8号でも、「われわれは納得できない」と題し、講和条約調印後、言論、思想、集会の自由を制限しようとする自由党政府の動きを激しく批判する政治論文を巻頭に書いている。彼はそこで、「……これが『自由諸国家群』に仲間入りしようとしている日本の手土産だとするなら、われわれは敢えて第二の朝鮮となる

危険を冒してまでソヴェト勢力に背を向ける必要はないと考える。日本の発展にとって最大のがんである天皇制が廃止されるだけでも、人民民主主義諸国の側に立つ方が国家百年の大計であるかもしれない」とも述べている。

これらの政治的発言が『アフランシ』で目立つことを憂えた松尾は、大沢に政治論文を掲載する際には事前に相談するようにと一本釘をさした。松尾と大沢とは、始めから政治に対する姿勢に違いがあったが、大沢が『アフランシ』を引き受けた直後に起こったこの事件はその相違を顕在化させる結果となった。清水や中道ほど若くはなかった大沢は、松尾とすることで袂を分かちはしなかった。彼らのつながりはそれほど弱いものではなかったのである。それに大沢は『アフランシ』を出していくことになんかの執念を燃やしていた。しかし、もはや自由クラブには未練がなかった。十一月二十日の日記はそのことを示している。

「清水の会合は強がりとうぬばれと一人よがりと負け惜しみだけである。」

かつては話すために集ったが、最近では飲むために集っている。飲んで騒ぐことよりほかになんの興味もない人達が幅を利かし、真面目になにかを考え、問題にしようとしている人達は来ないか、それともそのなかに巻込まれている。

ぼくもずい分頑張ったつもりだが、もう厭になった。誰もぼくの意図を理解せず、反対もせず、協力もせず、つまりは完全に無視して、ただけむたがり、『大変でしょう』などとお上手を言い、あらゆるビジネスをばくに押しつけて、自由クラブなどとはざいている。

なにが自由クラブ！

四年だか五年だかかなりの時間を割いてぼくが努力してきた運動が、こんなぶざまな飲み仲間の集りに終るとは、なんということだろう。

アナキズムをごく少数の人達に知らせただけで、そこからなにも新しいもの、すぐれたものも生まれず、うぬばれと自己満足の渦中に溺れてしまっている。

それはたった四年にすぎないからかもしれない。

なにか新しいもの、すぐれたものが生まれるためには十年、二十年の年月が必要なのかもしれない。

しかし、いまの自堕落なメンバーの誰に期待しろというのだろうか。

かつてのクラブの集りは面白かったし、得るところがあった。

ある時などは会合へ行くのが楽しみでさえあった。だがいまはもうそんな気持もしない。ただ煩わしいだけだ。

だから行かなければいいのだ。」

この大沢の自由クラブの総括は、私的な日記に書かれたものだから冷静さに欠け、全体的な視野の拡がりがない。しかし、かりに後世の人びとが自由クラブの時代を回顧する時、このようなしめくくりが私的にせよあったことは、心に留めておくべきであろう。

その後、自由クラブはシミズなどで断続的に集りを開くことはあったが、次第にその形を失っていった。『アフランシ』はそれから約六年、一九五七年三月に石川三四郎を追悼する号を出すまで、ほぼそながら継続された。34号で廃刊した時、松尾は大沢の独断だといひ、大沢は六年間、だれがなにをしたか、と反駁したという。